

思い出の名歌名演

生で聴く優れた歌や演奏に接すると、鳥肌が立つ！

CDなどの音源からでは、たとえ優秀な音響機器でもそこまでの感覚はなかなか得られない。

逆にライブでは、歌唱や演奏のレベルがそれほど無くても、ファンは熱狂する。直かに接して「雰囲気酔う」効果が理屈を超えてしまうのだろうか？

そうだった感覚に浸れた思い出が、僕にもあった。

.....

・四十年ほど昔、新宿歌舞伎町のクラブ。

いつの間に登場したのか、目と鼻の先で妙齢の女性がマイクを手に歌謡曲を歌いだした。プロデビューして数年になるという。

どうやら、これから売り出す曲のようで、その全国キャンペーンが始まったらしい。

歌は、「みちづれ」。歌い手は牧村三枝子さんといった。歌詞もメロディーも典型的な演歌である。

端から、演歌歌手特有のつやのある歌い上げ方に引き込まれた。すぐ傍で聴いていることもあって、漏れるブレスにも色気が漂い、ソフトで温かい響きに全身が包まれるようだった。音響機器による加工された再生音ではこうはいかないだろう。

ピアノは常設されていたが、伴奏はそのピアノで無かったと思う。別途、音源は持ち込まれていたのだろうか。その辺の記憶は無いが、ギター一本でも十分足りる歌唱力を感じた。無伴奏でも十分でないかと思った。

そして、巡り合った男女の距離が次第に詰まってゆく運命を連想させる歌詞に、「みちづれ」は言い得て妙のタイトルだった。

他のジャンルの音楽ほど演歌には接して来なかったが、新人にしてこのレベル。演歌界の凄さを垣間見た気がした。

・フォレスタという男女各々5〜7人で結成する合唱グループ。

BS日テレが定期番組「BS日本・こころの歌」を二十年前に開設、僕ら夫婦は毎週のように聴いて十四・五年ほどになる。

このグループがたまに、全国で演奏会を開くことがあって、何回か聴きに行った。

お気に入りの歌い手がバリトンの今井俊輔さん。

東京芸大音楽科を首席で卒業、大学院を経てイタリヤで修行したという。その声のまろやかな響きを僕らはとても気に入っている。

中でも、軍歌の「麦と兵隊」。

♪徐州々と人馬は進む ♪徐州居よいか住みよいか・・・

♪戦友(とも)を背にして 道なき道を ♪行けば戦野は夜の雨・・・

彼がソロで歌い上げるしみじみとした哀感あふれるシーンは、ピ

アニッシモでもさすがオペラで主演を張る声量が、ひたひたとコン

サート会場の隅々に響き渡るようだった。

この曲を聴くと、僕は何故か不思議と妻の父親が最初に送られた戦地、中支の夜の麦畑を黙々と行軍する様子を連想してしまう。

一方妻は、写真でしか知らない父親の風貌とどこことなく似ている

今井さんに、父親を重ねていたと思う。

思い入れが、ひとしおの効果を生む例（熱烈なファンが味わう感

覚）である。

（なお、生気なことを言うようだが、このグループによる演歌はあまり好きでない。教科書のように行儀良く歌うから）